野戦軍司令官から、ジャマーアト・アミールへ

北　川　誠　一

目次

初めに
第1節　第1次チェチェン戦争（1994-1996年）期のチェチェン軍部隊編成
第2節　戦間期（1996－1999年）チェチェン軍事体制
第3節　第2次チェチェン戦争開始期のチェチェン軍部隊編制
第4節　ジャマーアト・アミールの出現
結語

初めに

僅か3年間の休戦期間を隔てるだけの第1次、第2次2度のチェチェン戦争は、全く別の世代によって戦われたのかも知れない。ルスラン・クルバノフは、この2つの世代について次のように説明する。「ソ連邦の時代に育った古い指導者はロシア人と歴史、共通の文化、ソヴィエト的メンタリティーなど多くの共通するものをもっていた。彼らは民間人を攻撃する時は何かしら罪の意識を感じることが出来た。彼らの内のあるものは、ロシア人の特殊要員と協力することができた犯罪者であった。第1次チェチェン戦争では、彼らはロシア人やシャリーアで犯罪とされている行為を行なえば恥ずかしく感じた。このため彼らはロシア人の宣伝に乗せられたのである」、「今度の戦争はチェチェン人の新世代によって戦われた。10年間の戦争の間にチェチェンでは、学校で学びもせず、コムソモールにも入っていなかった新しい世代が成長した。彼らはロシアとは何の関係も持っていないのだ。1994年に8歳か10歳だった子供は今では20歳だ。彼らはロシア的なるもの全てを、言葉、文化、象徴、法律を全く嫌っている。彼らはロシア人に血、死、恐怖の現物で仕返ししたいと思っている」(1)

チェチェン社会の世代的分析は、早くも第1次チェチェン戦争直後にも行われた。ロシア人ジャーナリストのバルブーロフは、状況の変化を次のように観察している。「18歳から20歳の若者は事実上普通の学校で勉強したことがない。結局1991年以来、我々は無秩序と無法状態にあった。多くの十代の若者は特に農村では人生で戦争しか目にしなかった。そこへ遣ってきたのが、布教団で彼らの目を開き、善と永遠に関する福音を説いた。子供たちは彼らの手に落ちた。こういう訳で新しい聖戦士がそろった。」(2) ここで、バルブーロフは、伝統的イスラームの信仰篤かったチェチェン社会に、ロシアで言う「ワッハーブ派」、あるいは原理主義として知られる政治的イスラームの影響が強まる背景を述べ、戦争が原因でチェチェン社会に原理主義が広まり、次に原理主義が新しい戦争の原因となる状況を予見しているのである。このようにロシアに対する戦争の指導原理は、第1次チェチェン戦争の民族主義から、第2次チェチェン戦争の政治的イスラム主義へと転換するの

であるが、それは、チェチェン社会の政治的指導層が共和国、地域、村落の各レベルにおいて、民族主義者から政治的イスラーム主義者に転換していくことを示唆している。若者のワッハーブ主義化という印象は、社会的統合原理のイスラーム原理主義化によって証明され、またそれはチェチェン社会指導者のキャリアの転換によって明白になるであろう。

ここでは一般的印象的にではなく、1992年から今日まで、チェチェン社会の指導者の経歴がどのように変化したかを、ロシアからの独立を目指す戦闘集団の指導者に限定して述べたい。分析対象とするのは、第1次、第2チェチェン戦争時の独立派野戦軍、およびその他の戦闘集団指導者の経歴である。第1次チェチェン戦争中にはドゥダイェフ政府の各戦闘集団に対する予算送達文書が、また第2次チェチェン戦争中にもバサエフ司令官の出納記録が、ロシア軍によって接収されているので、将来そのような記録が公開されれば、戦闘集団および司令官の氏名は明らかになるであろうが、ここではロシア側、チェチェン独立派側、および内外ジャーナリストの報道記事から筆者が抽出した人々を考察の対象とする。従って、分析に必要な母集団、即ち軍事的指導者の氏名が完全には明らかにされたとは言えない。また、これらの人々の経歴も特に第2次チェチェン戦争以降に現れる人々については不明なことが多い。チェチェン革命期（1991－2年）、ドゥダイェフ政権期（1993－4年）、第1次チェチェン戦争期（1995－6年）、戦間期（1997－9）、第2次チェチェン戦争期（1999年以降）にチェチェン社会の指導者がどのような人々であったのかは、将来完全なデータに基づいて研究されるであろう。

第1節 第1次チェチェン戦争期のチェチェン軍部隊編制

第1節第1項 チェチェン共和国独立宣言当時の兵力

1991年まで当時のチェチェン=イングーシ・ソヴィエト社会主義共和国の領域に存在した武装集団は、北コーカサス軍管区所属のソ連軍諸部隊と内務省、KGBの武装部隊であった。所謂チェチェン革命の結果連邦軍が移動すると、イングーシと分離して独立を宣言したチェチェン共和国に存在した公的な武装集団は、シャリ戦車連隊と内務省部隊であったが、既に、独立宣言に先だった1991年にチェチェン全人民議会派は、少数の民兵（「民族（国家）防衛隊 natsional'naja gvardija」を有していた。(3)
ドゥダイェフ夫人アラは回想録で、1991年11月9日の大統領就任式典後、かって、チェチェン=イングーシ・ソヴィエト社会主義共和国の徴兵部長（nachal'nik mobilizatsionnogo otdela)、ゲラニ・アフマドフ Gelani Akhmadov が、ドゥダイェフに対して「現在、チェチェン共和国には、3万人の民兵がいます。各郡で、農村ソヴィエトには軍事本部が設置され、司令官が選出され、各人のもとには任務が与えられ、電話切断の際のため、伝達連絡が組織されています。一部は、各所に配備されています。予備兵力は1万人で、各人のための書類も用意されています」と報告したと述べる。(4) 1991年11月26日、ドゥダイェフはソ連軍北コーカサス軍管区訓練センターの P.Sokolov 将軍に対して、民族防衛隊6万2千人、民兵30万人がいると、誇示したが、(5) この時、ドゥダイェフは同月27（あるいは26）日、「共和国内の武器、軍隊の機器類の国有化令」を発布し、翌年7月8日までにチェチェン領内のソ連軍は大量の武器弾薬を残して移動した。(6)

このようにして、建軍された「チェチェン共和国国防軍 VSChR」は、最高司令官（glavnokomandujushshij）は大統領、参謀総長ヴィスハン・シャハボフ Viskhan

Shakhabov[7]、副参謀長アスラン・マスハドフ Aslan Maskhadov（1992年帰国、1994年１２月より参謀総長に昇格）であった[8]。なお、大統領親衛隊長には、最初ルスラン・ラバザノフ Ruslan Labazanov が就任した。[9]

しかし、スィーリーは、参謀本部設置を、1993年３月のクーデタの2日後であるとする、また発表した動員計画では、現有15,000人、３日以内に30,000人、10日以内に600,000人であるとする[10]。

チェチェンでは1993年大統領直轄統治を臨むドゥダイェフと議会派が対立するに至ったが、反大統領派の勢力が伸張する中、３月大統領派のバサエフ Sh. Basajev のアブハズ大隊、チェチャイェフ Salman Chechajev の内務省特殊任務警察隊、イサイェフ S.Isajev のシャリ Shali 戦車連隊等の部隊が放送局を占拠した。その後首都戒厳司令官に任命されたのはハンカロフ Khamzat Khankarov であった。一方、反ドゥダイェフ派は、イブラギム・スレイマノフ Ibragim Suleimanov のヴェデノ Vedeno を中心にするグループ、アルグン Argun の元大統領警護隊長ラバザノフの部隊、ナドテレチュヌイ Nadterechnye のアフトルハノフ Umar Akhturkhanov の集団があり[11]、また、元グロズヌイ市長ガンテミールフ Bislan Gantemirov はウルス=マルタン地方に割拠した。

第１節第２項 第１次チェチェン戦争開戦時の兵力

先に延べたようにドゥダイェフ政権は動員令を発しており、またソ連軍武器を接収していた。ロシアの北コーカサス合同軍司令官トロショフ Gennadij Troshev は、「既に第１次チェチェン戦争の初期に、ドゥダイェフは相当の兵力を持っていた。２個旅団、７独立連隊、３独立大隊。兵員数は５－６千ほどで、緊急（５－７日間）補充すれば、１万５千から２万人になった[12]。また、ロシア軍のグロズヌイ入城後の1995年３月１日段階では、戦闘員約９千、内350は外人傭兵、編成は継続中であり、グデルメス Gudermes とシャリの２方面防衛が中心で、シャリ方面防衛の指揮はアスラン・マスハドフがとった」。[13]。

開戦時、ロシア軍が把握していたその５、６千人のチェチェン軍は、４個の方面軍に分割されていた。[14]

１）北西戦線。アルサノフ Vakha Arsanov（1996年段階）

２）南西部戦線。司令官ゲリスハノフ Sultan Geliskhanov、副官ザカイェフ Akhmad Zakajev

３）東（東南）戦線。司令官イスラピロフ Khunkarpasha Israpirov

４）中央とヴェデノ（あるいは南部）戦線。司令官バサイェフ Shamil' Basajev

一方、トロショフは、1995年８月チェチェン側は、総兵数５千、４地区に終結、東、南、西、中央で[15]、西は Dzhaniev の700、南はゲラエフ Ruslan Gelajev の1000、中央のゲリスハノフと東のシャミル・バサエフ合わせて2000、司令部はダルゴ Dargo であると述べていて、断片的なチェチェン側資料を合わせた情報とはことなるが、アラ・ドゥダイェフは回想記の中で、南西戦線司令官として、ゲライェフの名を挙げている[15]ので、ゲリスハノフは、似た名前のゲライェフの誤解か、あるは人事異動があったとも考えられる。

バサイェフ、ゲライェフ、イスラピロフのようなアブハズ戦争従軍者、バサイェフ、ゲライェフ、ゲリスハノフのように、チェチェン革命参加あるいは紛争でのドゥダイェフ支持者が重要な任務に就いていることが明瞭である。

常備軍からなっていた方面軍司令官直属部隊以外に部隊は、郡や市町村単位で編成された。例えば、1996年のバムト Bamut 村防衛戦では、ガランチョジュ Galanchozh 村の連隊（司令官ハチュカイェフ Kh.Khachukaejv（Khizir Khachukakjev であろう）、バムト村のハイハロフ R.Khaikharov[17] の大隊、アムリイェフ A.Amriev（Assa）の特別編成部隊、その他が参加。兵員全体（兵員1000、内傭兵200）の指揮をイングーシのアルシュティ Arshti 村の人アルバコフ Shirvani Albakov がとり、資金はシルヴァニの親戚の石油業者アダム Adam[18] が提供した。アダム・アルバコフはグロズヌイ石油製品製造販売工場総支配人であった。[19]

第1節第3項 野戦軍司令官経歴分析[20]

① アブドゥルハジイェフ、アスランベク Abdurkhadzhijev Aslambek。1961年ゲルマンチュク Germanchuk 村の生まれ、1991年チェチェン革命参加、アブハジア戦争参加（1992年）、シャリ郡戒厳司令官（1994年）、野戦軍司令官、1997年チェチェン・コントラクト・グループ総支配人に就任（Daniel'.s.354）

② アルサノフ、ヴァハ Arsanov Vakha。交通警察官、1991年チェチェン革命参加、チェチェン共和国議員（1991年）、北西戦線司令官（1996年）、副大統領（1997年）（Daniel',s.356)

③ アルサヌカイェフ、アブ Arsanukajev Abu。1991年チェチェン革命参加、1995年まで大統領警護官、大統領府直属防諜特殊部隊長官(1995年（Daniel',s.356)

④ アトゲリイェフ、トゥルパルアリ Atgerijev Turpal-Ali。1969年グデルメス生まれ、アブハズ戦争に参加（1992年）、チェチェン共和国内務省勤務（1992-4年）、野戦軍司令官、東部で活動、、ペルヴォマイスク戦に参加（1996年）、国防軍特殊部隊長、マスハドフ大統領候補選挙事務所長（1997年）、1997年第一副首相（Daniel',s.35 6)

⑤ バサイェフ、シャミル。ソ連軍従軍経験あり。チェチェン革命参加（1991年）、アブハズ戦争従軍（Daniel',s.358)

⑥ バサイェフ、シルヴァニ Basajev,Shirvani。シャミルの弟。野戦軍司令官、ヴェデノ郡知事（Daniel',s.359)。

⑦ バタイェフ、ハムザト Batajev Khamzat。野戦軍司令官、バムト郡戒厳司令官（Daniel',s。359)。

⑧ ゲライェフ、ルスラン。コムソモルスコエ村生まれ、アブハズ戦争参加（1992-3年、大統領連隊を指揮)、野戦軍司令官、南西方面軍司令官。副首相（1997年)、1998年国防相（Daniel',s.362)。

⑨ ゲリスハノフ、スルタン Geliskhanov Sultan。1965年生まれ、内務相(1993年)、国家保安部議長（1993-5年)、国防軍特殊部隊長（1995年)、野戦軍司令官、東部で活躍（Daniel',s.362)。

⑩ ザカイェフ、アフマド Zakajev Akhmad。1959年生まれ。チェチェン=イングーシ共和国俳優協会議長（1980年)、文化相（1993年)、野戦軍司令官、大統領顧問、1997年第一副首相（Daniel,s.367)。

⑪ イサイェフ、ウスマン Isajev Usman。1957年クララ村 Kulara 生まれ、民族友好大学卒、外交官（1984-8年)、チェチェン=イングーシ法務省勤務（1988-1991年)、法律改

定委員会議長（1991-3年）、ナショナル銀行頭取（1993年）、検事総長（1994年）、野戦軍司令官（1995年解任、1996年何者かに誘拐、殺害される（Daniel',s.369)。

⑫ イスラピロフ、フンケルパシャ Islapirov Khunkerpasha。アレロイ Alleloi 村生まれ、アブハジア戦争参加、野戦軍司令官、キズリャル作戦（1996年）に参加、1997年反テロリズム・センター長（Daniel',s.369)。

⑬ マダイェフ、イサ Madajev Isa。チリ=ユルト Chiri Jurt 村出身。野戦軍司令官。国家保安部副長官（Daniel',s.375）

⑭ マスハドフ、アスラン Maskhadov Aslan。1951年生まれ。ソ連陸軍大佐。チェチェン共和国国防省副参謀長、参謀総長、1997年大統領（Daniel',s.375)。

⑮ マハイェフ、ドク Makhajev Doku。ゲヒ Gekhi 村出身。ソ連陸軍将校、野戦軍司令官。西南方面軍副司令官（Daniel',s.375)。

⑯ マハシェフ、カズベク Makhashjev Kazbek。チェチェン・イングーシ共和国内務省労働矯正部勤務(1980年代)、1994年チェチェン共和国内務相、1997年副首相（Daniel',s.376）

⑰ モヴサイェフ、アブースピヤン Movsajev Abu-Supijan。1959年生まれ、内務省シャリ郡 RUDV 支部長、シャリ郡国家保安部職員、野戦軍司令官、ブジョノフスク作戦参加、国家保安部長官（1995-1997)、国防軍特殊部隊勤務後退役（Daniel',s.377)。

⑱ ラドゥイェフ、サルマン Radujev Salman。1967年生まれ、グデルメス郡知事（1992年)、野戦軍司令官、1996年キズリャル作戦指揮官。ドゥダイェフ大統領軍は、私兵部隊である（Daniel',s.381）。第 6 大隊長、ドゥダイェフ大統領死後、ヤンダルビエフの曳きを得て准将に昇進するが、1998年マスハドフ大統領によって階級剥奪される[21]

⑲ ライソフ、モヴラディ Raisov Movladi。国家保安部特殊部隊長（Daniel's.381)。

⑳ ハイホロイェフ、ルスラン Khajkhorojev Ruslan。1963年バムト村生まれ、農民、野戦軍司令官、西部で活動（Daniel',s.388）

㉑ ハチュカイェフ、ヒズル Khachukajev Khizir。野戦軍司令官、西部で活動、1996年サマシュキ防衛戦参加（Daniel',s.389)。

大部分の武装集団の指揮者は、実質はともかく形式的には、大統領および参謀総長の隷下にある正規軍であって、グロズヌイ防衛戦、ブジョノフスク作戦、キズリャル作戦、バムート防衛、グデルメス攻略、グロズヌイ攻略等に従事したのである。しかし、戦時編成下の正規軍の形式をとっているとしても、実際は同一テイプ（氏族）の成員を中心に編成した組織であることは、言を待たない。これらの野戦軍は、前身の種々の武装した国家機関の時期から、実際は同一テイプ内からリクルートされたといわれている。「チェチェン人野戦軍司令官の行動は、彼らが属するテイプの態度により、進められ規制されている」とチャールズ・ブランディは述べる[22]。テイプが異なれば戦闘集団内部で完全な忠誠、信頼は得られないと考えられたからである[23]。

外国人部隊の存在は、目立つものではなく、著名な指揮者はイブン=ハッターブの存在だけであった。

また、イスラーム原理主義との関わりもドゥダイェフ政権自体とそう異なるものでなく、若いゲライェフが原理主義に系統している以外は、バサイェフやラドゥイェフが、黒地に

白抜きでコーランの章句を染めたリボンを用いることがあるとはいえ、顎鬚や帽子から判断する限り、ワッハーブ主義に傾倒した服装とはいえない。同じ時期の隣国ダゲスタン共和国チョバンマヒ Choban Makhi 村の原理主義者ジャイルッラー Dzhairulla 氏の服装とは明らかに違っている。

第2節 戦争間期のチェチェン軍事部隊編成

ドゥダイェフ大統領は1996年4月にロシア軍のミサイル攻撃により爆死し、ヤンダルビイェフ副大統領が替わって大統領に就任した。同年8月のハサブユルト協定でロシア政府とチェチェン独立派との間に休戦が成立。翌1997年1月大統領選挙が行なわれ、マスハドフ Aslan Maskhadov が勝利した。以後第2次チェチェン戦争が始まる1999年8月まで、チェチェン共和国は半独立状態にあった。この時期のチェチェン軍兵力は、50大隊規模の2万人で、3万人以上に増員可能であった。(24) 組織の概略は以下である。

I 大統領防衛隊（prezidentskaja gvardija）指揮官 イリヤス・タルハノフ Il'jas Talkhanov 後に、アブドゥラフマノフ A.Abdurahmanov (22)、2千人。

突撃大隊 desantno-shturmovyj batali'on（3個中隊 rot より編成）
自動車化歩兵大隊（3個自動車化歩兵中隊および、大統領護衛中隊）
儀杖兵中隊
騎兵中隊

II チェチェン=イチュケリア共和国国防軍（VSChRI）、2万人

アブハズ突撃大隊（シャミル・バサイェフ）
ムスリム大隊（アルビ・バライェフ）
ガランチョジュ特殊任務連隊（司令官ルスラン・ゲライェフ）
シャリ戦車連隊（司令官サイプッディン・イサイェフ）
3個戦車大隊（divizion）
1個自走砲大隊（divizion）
RSZO 連隊
3個大隊（divizion）
高射砲連隊
3個 ZRK（高射ミサイル）大隊（divizion）
対戦車連隊
3個 PTUR（対戦車誘導ロケット）大隊
砲兵大隊
第1および第2自動車化歩兵連隊
3個大隊 batal'on
砲兵大隊 divizion
対戦車大隊
高射砲大隊
第3歩兵連隊

3個歩兵大隊
砲兵大隊
対戦車大隊
高射砲大隊
山岳歩兵連隊（司令官イブラヒム・アルサヌカイェフ Ibragim Arsanukajev）(26)
2個工兵大隊
2個連絡大隊

Ⅲ その他の武装した機関
税関および国境警備隊

Ⅳ 政府未承認の私兵部隊、ワッハーブ派戦闘集団

上の表は、主要な官職がほとんど空白であり、氏名が知られるのはバサイェフ、ゲライェフなど数名に過ぎない。第1次チェチェン戦争の著名野戦軍司令官は、むしろ内閣に官職を得ることになった。

以下に不十分ではあるが、第1次マスハドフ内閣（チェチェン・イチェケリア共和国憲法は強力な大統領制で、日本の議院内閣制とは大きく離れているあるので、このように表現しても誤解はないであろう）の閣僚名簿を示そう。(27)

大統領	＊アスラン・マスハドフ
副大統領	＊ヴァハ・アルサノフ
首相	＊シャミル・バサイェフ
第一副首相	＊トゥルパアリ・アトゲレイェフ（経済）
副首相	＊ カズベク・マハシェフ
	＊アフマド・ザカイェフ
外務大臣	イリヤス・アフマドフ
内務大臣	＊カズベク・マハシェフ（兼務）
	アプティ・バタロフ
	アイダミル・アバライェフ
経済大臣	＊トゥルパアリ・アトギレイェフ（兼務）
保険大臣	ウマル・ハンビイェフ
国家シャリア安全大臣	アスランベク・アルサイェフ、
	前任者 アブドゥルメリク・メジドフ Abdu al-Melik Mezhidov
国防大臣	＊ルスラン・ゲライェフ
	マゴメド・ハンビイェフが更迭（s.2004.3）
国家安全長官	＊アブースピヤン・モヴサイェフ
軍事防諜長官	ロムアリ・バイスグロフ Rom-Ali Baisugurov
シャリーア防衛隊長	マゴメド・ハンビイェフ
国境および税関郡司令官	マゴメド・ハタイェフ
特別誘拐対策連隊長	マゴメド・マゴメドフ

反テロリスト・センター長官　＊フンカルパシャ・イスラフィロフ
大統領警護隊長　アブドゥラフマノフ Abdurahmanov,A.（2002現在）

氏名の前に付した星印は、第1節の野戦軍司令官①－⑳に氏名が見られる者である。また＊の付されなかった者にも経歴から見て軍務についていたもの、また野戦部隊に所属していたとみなし得るものもあろう。即ち、マスハドフ政権の閣僚の殆どが、第1次チェチェン戦争当時の野戦軍司令官であり、さらにその内の多数が、第2次チェチェン戦争時にも野戦軍司令官として戦闘に従事する。これはドゥダイェフ政権の閣僚とは全く異なっている。以下に述べるドゥダイェフの主要閣僚の内、ただ一人軍事に関わったことが確認されるのは、文化大臣ザカイェフのみである。内務大臣アルバコフ S.Albakov、エルディイェフ M.El'dijev、外務大臣シャラフッディン・ユースフ Sharafuddin Jusf（ベノ Beno)、経済大臣アブーバカロフ Tajmaz Abubakarov、法務大臣イマイェフ Usman Imajev、文化大臣ザカイェフ Akhmad Zakajev、農業大臣ビスルタノフ R.Bisultanov、教育大臣ヤンダロフ A.Jandarov、モヴサイェフ S.Movsajev、ヤリハノフ Khoja-Akhmad Yarikhanov、国家安全部長官ハスィミコフ S.Khasimikov、情報出版大臣ウドゥゴフ Movladi Udugov[28]。

このように戦間のチェチェンでは第1次チェチェン戦争時の有力な野戦軍司令官が、内閣、軍の高官に名前を連ねていることが明白であろう。さらにそのうち軍制表にあるバサイェフ、ゲライェフ部隊はもともと私兵である。しかも、彼らは平時においても指揮下部隊を国軍の通常編成に戻すことなく、戦時編成に留めた。更に、政府の実入りのよいポスト、私兵を得た司令官たちは政府の正式な地方行政官とは無関係に、あるいは無視して、地方を掌握することになった。その状況は以下の通りである。

戦間期の主要野戦軍司令官[29]

氏名	掌握地域
サルマン・ラドゥイェフ	ノジャイ=ユルト郡、ウルス=マルタン郡のサマシュキ Samashki、ヤンドィルケ Jandujrke、ゲヒチュー Gekhi-chu。

連隊所属の大隊には通し番号が付され、サルマン・ラドゥイェフは第6大隊長であったが、これは元来私兵部隊で、「ドゥダイェフ大統領軍」と自称していた。さらに、ドゥダイェフ大統領の婿（ドゥダイェフの兄弟あるいは従兄弟の娘の夫）であるラドゥイェフは、ドゥダイェフが生存していると称して、マスハドフ大統領の権威を承認しない態度をとった。

シャミル・バサイェフ	ヴェデノ、シャリ、シャトイ、アチホイ=マルタン各郡、ウルス=マルタン郡の一部
ルスラン・ゲライェフ	グロズヌイ、アルグン
アルビ・バライェフ	ウスル=マルタン郡

バライェフ Barajev Arbi が、公に名前が知られるようになるのはこの時期である。彼

は1973年のアルハン=カラ生まれで、ソヴィエト的価値観に触れる機会のなかった新しい世代の人間である。1991年に民族防衛隊に入隊、ヤンダルビイェフのボデーガードを勤める。第1次チェチェン戦争で何をしていたかは全く不明であるが、戦間期には誘拐と殺人で名前が知られるようになる(30)。2002年モスクワ劇場占拠事件の首謀者モヴサル Movsar は甥である。第1次戦争期の活動が不明である人物ではラムザン Ramzan、リズヴァン Rizvan などのアフマドフ兄弟、スリム Sulim、ハリード Khalid、ジャブライル Dzhabrail などのヤマダイェフ Jamadajev 兄弟が重要である。彼らも私兵集団を維持して、戦間期には強盗、密輸、麻薬取引、誘拐等の犯罪を続ける一方で、アフマドフはウルス=マルタンに、ヤマダイェフはグデルメスに地歩を築いた。マスハドフ政権自体が、出身テイプ（部族）で固められていて国民的基盤を欠いていたので、このような軍閥割拠の状況を打破することができなかった。やがて、イスラーム法に基づく神政一致国家体制を求めるアルサノフ副大統領、バサイェフ（元）首相、ヤンダルビイェフ前臨時大統領らは、世俗派のマスハドフと袂を分ち、1999年2月5日に評議会 Madzhlis-Shura を設立し、バサイェフを議長（amir）とし、対抗政府を樹立した。

バサイェフの評議会には、最高軍事評議会 Vyshshij Voennyj Madzhlis-Shura がもうけられた。数十人におよぶ野戦軍司令官の多くは、マスハドフ政権を去ってバサイェフ側に加わったので、政府は軍事的に劣勢に陥った。1999年8月、第2次チェチェン戦争の原因となるダゲスタン進攻を企てたのはこれらの人々であった。

第3節 第2次チェチェン戦争

第3節第1項 第2次チェチェン戦争の兵力展開

ロシア側資料から見る限り、野戦軍司令官の割拠および1999年夏の兵力は、主要な集団に限れば以下の如きである(31)。マスハドフ派の小部隊は数え上げられていないと思われる。

① バサイェフと副官ドルグイェフ Dolgujev（1999年12月死亡）、ヴェデノ郡、シャリ郡に2,500人。『ウトラ』紙はこの他にシャテリ郡、アチュホイ=マルタン郡、ウルス=マルタン郡の一部を加える。

② ハイロイェフ R.Khajrojev（1999年11月死亡）は、西部のバムト、アチホイ=マルタン、スンジェに部下500人。

③ イェルホイェフ Erkhojev(32)。西部のバムトに 50人。

④ バグライェフ Bagurajev。北部のイシュルスカヤ・コサック村 St.Ishshrskaja。彼はナウル郡長 Taus であると思われる(33)。

⑤ ゲライェフ。グロズヌイ近郊、ウルス=マルタン、シャトイ、コムソモルスコエ、アチホイ=マルタンに兵員500人。配下に17人の司令官を擁していた(34)。

⑥ ラドゥイェフ。グデルメス、ノヴィエゴルダリ Novye Gordali に兵員600人。『ウートラ』紙は、勢力地域にノジャイユルト、サマシキ、ヤンドゥイルカ、ウルス=マルタン郡のゲヒチューを加える。

⑦ ムルダシュフ Vakhid Murdashev とヤマダイェフ兄弟。グデルメスとノヴォグロズネンスキー。

⑧ ゲリスハノフ、ノジャイ=ユルトに部下150人。

⑨ ハッターブ。セルジェント=ユルト、シャリ、ヴェデノなどに550人。
⑩ アラビ・バライェフ（1999年死亡）。ウルス=マルタンとブラツコエ Bratskoe に部下200人
⑥ アトゲリイェフ Turpal-Ali Atgeriev, 北部の Sholkovskoe、200人
⑩ ハタチェフ Khattachev。ウルス=マルタン、300人
⑪ アスルディノフ Magomed Asludinov。東南部ヴェデノ地方のダゲスタン国境に近い Kenkhi 村、100人
⑪ アバライェフ Aidamir Abalajev。東南部ヴェデノ地区の Zandak、150人。

1999年ロシア軍の進攻が始まると、マスハドフはバサイェフと和解し、中央戦線指揮官に任命したが、2年後の2001年、全国は、少なくともバサイェフ派に関する限り6戦線に区分されていた(35)。

① 西部戦線、司令官 アフマドフ Ramzan、 Rizvan、Ruslan, Akhmadov 兄弟。ラマザンは、バサイェフのアブハズ大隊に参加。帰国後郷里のウルス=マルタンで自分の私兵集団を組織、同地域で他集団を圧倒。1997年から1999年までに20人ほどの人々を誘拐したといわれる。兄弟のウヴァイス Uvais はシャリーア安全省のウルス=マルタン郡の責任者である(36)。ルスランは、アゼルバイジャンで身柄を拘束され、ロシアに引き渡される。リズヴァン Rizvan は、2000年6月戦死。ラムザンの部隊は、バサイェフ側では、「イスラム旅団」と呼ばれている。配下のリーダーにキリ Kiri、フセイン Khusein、ウマロフ Doku Umarov などがいた。
② 南部戦線、司令官アブドゥルハディイェフ Aslambek Abdulkhadijev。2002年8月戦死。
③ 中央戦線。司令官は、サウジアラビア人のアブー・ダル Abu Darr。彼は アル・ハラマイン団から派遣された。2000年6月シャリのセルジェン=ユルトで連邦軍に包囲され、ハッターブと合流した。
④ ヴェデノ戦線。ハムザット Khamzat、アブー・ヤクーブ Abu Jakub、シルバニ・バサイェフ（2000年10月27日、ヴェデノで戦死）。ハムザットは場所的にゲライェフではないと見られる。
⑤ 東北戦線、ハッターブの副官アブー・ウマル Abu Umar。彼は2001年5月31日ヴォルゴグラードでテロを実施。
⑥ 南西（東南）戦線、司令官ハッターブ。部隊名は「アラブ義勇兵部隊」あるいは「イスラム平和維持軍」。部下として、ラッパニ Khalilov,Rappani 等の野戦軍司令官を擁した。2002年3月のハッターブの死後は、アブー・アル・ワリード Abu al-Walid が指揮を執った。アブー・ダルの部隊、ヴァハ・アルサノフのボルツ特殊部隊が合流している。ワリードも、2004年夏ノジャイ=ユルトで戦死。

一方、マスード大統領派（政府軍）は、
① ゲライェフが、グルジア、イングーシェティア国境に兵力を展開した。ゲライェフは指揮下に17人の野戦指揮官（アミールと称する）を有した。2004年2月ダゲスタンで戦

死。

② マゴメド・ハンビイェフ国防大臣直属部隊。ハンビイェフは、2001年11月戦死。

③ アイダミル・アバライェフ Ajdamir Abalajev 内相の直属部隊（250人）。ノジャイユルト郡のアレロイが根拠地であった。

④ ザカイェフ Zakajev Ahmad（2000年8月、ウルス=マルタンのゲヒで負傷）、以後、海外で活動。

第3節第2項 第2次チェチェン戦争でのチェチェン国軍組織崩壊

1 投降・捕虜・戦死などによるチェチェン側野戦軍司令官の中立化[32]

① アルサノフ、ヴァハ。副大統領。開戦時はグルジアに滞在、後イングーシに移住して、軍務には就かなかったので、2001年1月に解任される。以後、カドウィロフ前大統領に庇護され、アレロイ Alleloi 村に居住、20005年1月13日チェチェン警察によって逮捕された[33]。

① モヴサイェフ Abu Movsajev、反諜報部隊長、1999年夏戦死

② ラドゥイェフ、1999年12月逮捕され、裁判後刑務所で死亡[38]。

③ アルサヌカイェフ Arsanukajev,Abu。ドゥダイェフの護衛隊長。2000年4月元連邦軍に逮捕。マスハドフ大統領に降格を命じられる。

④ アスタミロフ Astamirov,Isa 将軍、副首相。2000年2月あるいは5月に戦死。マスハドフ派。

⑤ ルスラン・アフマドフ、2000年6月逮捕。

⑥ ドルガイェフ Dolgajev,Abdulzhan、ゲライェフの副官、1999年アルグンで死亡。

⑦ ハムザトフ Khamzatov,Movladi、将軍、2000年4月ゴイトイ村で逮捕。

⑧ ハトウイェフ Khatujev,Magomed、将軍、2000年1月ヴェデノで重傷。

⑨ サイダイェフ Saidajev,Mikhail（ムマディ Mumadi）。将軍、マスハドフの参謀、2000年9月27日、ウルス=マルタンで逮捕される[39]。

⑩ モゴメド・ハンビイェフ。国防大臣、2000年11月ベノイ村で負傷し、引退。2004年3月部下と共に投降[40]。

⑪ ハスヌカイェフ Khasukhanov Islam。マスハドフの参謀で2001年にはマスハドフの代理としてバライェフ、アフマドフとの作戦会議にも出席した。2002年4月逮捕[41]。

⑫ バライェフ。2001年6月23日。アルハンカラ Alkhan-Kala で戦死[42]

⑬ リズヴァン・アフマドフ、2002年6月29日、グルズヌイ近郊で戦死[43]。また、彼の兄弟で後継者ゼリムハン Zelimkhan も同年9月14日に殺害された[44]。

⑭ ハッターブ、2004年死亡。部下あるいはロシア側特務機関に毒殺されたと考えられる。

⑮ ゲライェフ、2004年2月、ダゲスタンからグルジア東部に潜入を試みてロシア軍に発見され戦死。他の野戦軍司令官の密告があったと信じられている。

⑯ アイダミロフ、 2002年4月30日戦死、待ち伏せ攻撃を受け戦死[45]。マスドフ派

⑰ アルサヌカイェフ、2002年5月戦死、マスハドフの参謀総長代理[46]。

⑱ バタロフ、将軍、マスハドフ派、2000年4月13日逮捕、 6月再逮捕[47]。

⑲ ゲリスハノフ、 2003年3月段階では戦闘から離脱[48]。

2　脱走行為によるチェチェン政府軍将官の降格・勲章剥奪(49)。

① イブラギム・サイドフ、大佐 polkovnik、バチ=ユルト Bachi Jurt（出身地、以下同じ）

② シェイヒ・メジドフ Shejkhi Medzhidov 同上 大佐、同上

③ レミ・クルチイェフ Lemi Kul'chiev、大佐、クルチャロイ Kurchaloj

④ イドリス・ガイボフ Idris Gaibov、大佐、同上

⑤ シェイヒ・ドゥバイェフ Dubajev、少佐、同上

⑥ マイルベク・ハスハノフ Khasukhanov、少佐、同上

⑦ ヌン・イダコフ Nun Idakov、大佐 、Tsatsan Jurt

⑧ アラシュ・アルサイェフ Alash Arsajev、大佐、同上

⑨ ナスィ・マザイェフ Nasi Mazajev、同上、同上

⑩ シャミル・イドリソフ Shaml' Idrisov、同上、グデルメス Gudermd

⑪ トゥルプアリ・タマイェフ Turpali Tamaev、同上、同上

⑫ サルマン・アブイェフ Abujev,Salman 将軍 brigadnyj general、アレロイ。

⑬ モヴサル・テミルバイェフ、少佐 Major,同上

⑭ アブバカル・バンタイェフ Abubakar Bantajev、大佐、コムソモルスコエ

⑮ アプティ・バタロフ Apti Batalov、同上、ナウルスキー

⑯ イブラギム・テミルバイェフ、同上、アルグン市

⑰ アブ・アルサヌカイェフ、同上、グロズヌイ市、第1次チェチェン戦争野戦軍司令官（上述）

⑱ アリ・スルタノフ、将軍、シャリ

⑲ イブラギム・フルトゥィゴフ Ibragim Khultygov、大佐、マフケトゥイ Makhtety

⑳ ヴァヒド・ムルダシェフ Murdashev, Vakhid（典拠。Pyganov。c.299)、将軍 brigadnyj general、ノヴォグロズネンスキイ。ノジャイ=ユルトの野戦軍司令官

マスハードフ大統領は、国防軍を戦時編成から平時編制に戻すことが出来なかった。有力司令官は、収入を伴った中央・地方の官職を与えられ、あるいは経済的な利権を与えられ、更に非合法な手段で得た収入で、き下の兵員を扶養しつづけた。野戦軍部隊は、軍閥化したのである。従って、1997年以降は武装集団を野戦軍と呼ぶことにはあまり意味がなく、元来その集団が正規軍で、指導者にチェチェン国防軍の身分が与えられているか、あるいはビジネスマンが元手を軍隊に変換した私兵部隊であるかどうかも、区別する必要のないことになった。むしろ重要なのは、大統領に忠誠を誓って予算の支給をうけか、それとも反大統領の軍事評議会に参加して、原理主義諸国の財政支援を受けるかこそが、重要な選択となった。

1999年の第2次チェチェン戦争開戦時、有力な野戦軍指令官の多くは、軍事評議会すなわち、バサイェフ、ハッターブ派についていた。戦争執行に伴い、マスハドフ派の将軍達は、戦死や捕虜、方針対立等によって次々と離脱した。テレク川以北をロシア領に残し、南部だけで独立し、ゲライェフを大統領とするザカイェフの計画以後は、マスハドフ大統領は軍事的には破綻したといってよいであろう。大統領府は実際のところ時折、大統領令を発布するだけの存在となっている。

軍事評議会も次々と古参の指揮官を喪っていった。2002年までに、6個の方面軍中、西

部、南部、ヴェデノ司令官が戦死し、中央方面軍は崩壊した。

第3節第3項 チェチェン戦争の傭兵化

ロシア人ジャーナリストのアンドレイ・スミルノフ Andrej Smirnov は、2003年11月28日、チェチェン西部で1人のチェチェン人武装集団の指導者アミール・ラマザン amir Ramazan とインタビューを行なった。ラマザンは、チェチェン人独立派は、全土を3つの戦線に区分していると語った。アルグンの西の西部戦線、東の東部戦線、チェチェン・イングーシの境界である。司令官は其々、ドク・ウマロフ Doku Umarov、アブー・アルワリード、ルスラン・ゲライェフである(50)。アブー・アルワリードの東部戦線司令官就任は、2002年のマスハドフ大統領の任命によるもので「公的」なものであった。

ドク・ウマロフは、第1チェチェン戦争の際には知られていなかった人物で、経歴を示す文章もないが、戦間期に誘拐、殺人などで勢力を扶養した犯罪者集団の頭目であったと見られている(51)。彼が2004年9月ベスラン Beslan 事件の責任者であったと言われている。

チェチェン国内においては（北部は除かれている）、独立派の内バッサーフ派は、兵力として傭兵を導入するに留まらず、僅か2名の戦線司令官中1名をアラブ人に頼っている。この状況は前述のように2001年には既に見られたことであった。以下に主要な外国人部隊指揮官について述べよう。

① イブン・ハッターブ Ibn Khattab。2002年3月毒殺（上述）。

② アブー・アブドゥッラーフ・ジャファル Abu Abdullakh Ja'far。パキスタン人で、アルバドル団のメンバー。ハッターブの資金窓口であった。アラブ傭兵200人を指揮しダゲスタンで活動(52)。

③ アブー・ダル　Abu Darr

サウジアラビア人で、アルハラマイン団の一員。2000年6月セルジェン＝ユルトでアラブ人傭兵部隊とともに駐屯していた。2001年5月17日戦死。ただし、トロショフは彼をワッハーブ派チェチェン人とする(53)。

⑤ アブー・ウマル Abu Umar。ハッターブの部下、地雷の専門家、1995年グロズヌイに地雷敷設、1998年ロシア軍の兵営を爆破し自ら負傷。ロシアでの爆弾テロを指導し、2000年5月ヴォルゴグラドの兵舎を爆破。2001年7月11日戦死。ハッターブは後任にアブー・サイヤフ Abu Sajjakh を任命したが、彼も11月戦死(54)。後任に2002年1月通称ウズベクの、オイラヒモフ Ojbek Rakhimov Mukhtarovich(Khusejn Rakhimov) が任命された。

⑤ アブー・アルワリード Abu al-Walid。1967年秋、サウジアラビアのナジュラン生まれ。国家防衛隊隊員、地雷技術者としてイェメン国境に派遣され、イェメン解放軍の援助活動に従事、その後士官学校（National Guard Academy）に進学、80年代にオサマ・ビンラーディンを知る。1995年ムスリム同胞団系「アルタンズィームアルハズ」の特使としてチェチェンへ来た。ハッターブの副官として活動。2000年夏セルジェン＝ユルトで連邦軍と交戦。ムスリム同胞団との窓口であったが、ハッターブとの間で資金分配上の紛争があり、同胞団のグルジア、アゼルバイジャン代表であるアブー・ラビーア Abu Rabia と秘密裏に交渉、ハッターブにとって替わろうとしていた。2004年に死亡

し、チェチェン妻および兄弟によって確認[56]された。

⑥ アブー・ヤクーブ Abu Jakub。 ハッターブの側近。2001年9月30日スタールイイェ=アタギで戦死[57]。

これらの情報は、ハッターブの国際義勇兵（傭兵）部隊である「イスラム平和維持軍」の幹部陣が、壊滅状態にあることを示している。

第3節 ジャマーアト・アミールの出現

前節で、ロシア人ジャーナリスト、アンドレイ・スミルノフのインタビューに応じたアミール・ラマザンは、ジャマーアトについて、「神の名において戦っているアミール（指揮官）に率いられた武装集団であると」説明している。また、各ジャマーアトは最高司令官から財政的、物質的援助を受けたと説明している。彼は2003年の夏に他のグループと共に北オセチアとイングーシの町々を除く各地に遠征したが、彼らの目的は、「黒海からカスピ海までの地域ににカリフ国を作ることである」とも述べている。

アラビア語でジャマーアトは、単に「集団」、「社会」を意味するが、「イスラム教徒の社会」のニュアンスを持つ場合もある。ロシアでは、モスクの建設維持にあたる地域の信者団体が、ジャマーアトである。一方伝統的にダゲスタンでは村落の意味で用いられたが、90年代にダゲスタン西部の3か村が、ロシアに属さないイスラーム教徒のジャマーアトであると宣言するに至って、この言葉は俄かにワッハーブ派的ニュアンスで理解されるようになった。チェチェンでも地域のワッハーブ派が、周囲の伝統的イスラーム教と違うワッハーブ派の儀礼に従う信仰団体を形成するようになるが、このこと事態はワッハーブ派の撲滅を主張するカドウィロフ大統領の支配地域では秘密にしなくてはならないが、ロシア軍に聖戦を宣言する指導者に従っていればなおさらである。

ジャマーアトについて、ジェマル Orkhan Dzhemal は「ムスリムは宗教的共同体を持っていて、キリスト教では教区と呼ばれるものである。それがジャマーアトと呼ばれている。擁するにイスラム教になれていないロシア人の耳には奇異にきこえるのである。『ワッハーブ派の陰謀に対する刑事事件』にあるようになにか秘密組織を指して用いられるのである」と述べているが、明らかにこれは、アミール・ラマザンの「共同体」について述べている[58]。

このアミール・ラマザンは安全上の理由から、姓と居住地を述べていないが、2001年1月にロシア当局によって逮捕されたアルグンのアミール、ラムザン Ramzan Khatajev[59]は、時間が前後するので同一人ではないであろう。次に関連情報の中から、ジャマーアト・アミールの記事を列挙する。

① 2004年8月アルグンではアブカリモフ Abukan Abukarimov 通称ゲラティ Gerati に率いられたジャマーアトの戦闘員6名が、チェチェン内務省職員によって射殺された[60]。

② 2003年12月31日、グロズヌイ近郊のゴイトゥイ Goity・ジャマーアトに属する、30歳のサビイェフ Imran Sabijev がグロズヌイで警官に射殺される[61]。

④ 2003年11月10日、グデルメスの南の村、アヴトゥリ Avturi・ジャマアト所属の戦闘員3名が警官を射殺[62]。

⑥　シャリ郡で地元のジャマーアトのアミール・サビイェフ Sabijev が逮捕される(63)。
⑦　2004年5月南部山地のウルス=マルタン・ジャマアトの指揮官ウダイェフ Taus Udajev が警官によって殺害される(64)。
⑧　連邦内務省の HP（2004年10月15日付）にグロズヌイの南ノーヴィ=アタギ（通称アタギ・ジャマアト）の活動が報告されている(65)。
⑨　グロズヌィの南でノーヴィ=アタギに接するスタールイイェ=アタギのジャマーアトに所属する兄弟が、アラブのコレイシュ部の家系を誇るサリホフ Said Pasha Salikhov を殺害(66)。スタールイイェ=アタギはヤンダルビイェフ元大統領の地元である。
⑩　グロズヌイ南西のアルハン=カラ Alkhan Kaka にもジャマーアトが存在する(67)。
⑪　更に、2002年グロズヌイ市のオクチャブリ区ジャマーアト・アミール、バシュタロフ Muslim Bashtarov が隠したと見られる武器が押収された(68)。

これらの地域はグロズヌイより東南から西南部にかけた平野部農村地域で、都市部を除くけば最も人口稠密な地域である。けして、山中に逃亡したゲリラ部隊ではない。彼らは自宅に居住し、アミールの指示がある時にだけ武装して、軍事作戦に従事するものと思われる。このように、ジャマーアト単位よる戦闘集団は、動員の形態において野戦軍方式の軍事組織とは全く異なったものである。これらの地域はスタールイイェ=アタギがヤンダルビイェフの出身地、アルグンはゲライェフの本居地、アルハン=カラがバライェフの根拠地などワ・ハーブ派系野戦軍司令官タイプとジャマーアト・アミールタイプの人々をつなぐタイプの人々と関わりの深い地域であった。数年前からジャマーアト組織の形成が始まっていると見られるが、問題は375におよぶチェチェンの村や町のいくつにここに述べるような戦闘的ジャマーアトが組織されているかということである。一旦このようなジャマーアトが作られれば、かってシャリーア防衛隊（隊長 Mezhidov）員であったというアフマド・ダライェフ Akhmad Dalajev は「もし個人が加われば、武器を与えられて、一兵卒になる。何人かを連れてくれば、無線機、オフロード車、全員に武器を与えられる。自分の集団のアミールつまり司令官になる。我々は月平均100から300米ドルを貰っている」と述べる。ダライェフは、ここで言うジャマーアトの機能を雄弁に述べている(69)。誰か彼かの野戦軍司令官の部下であるか、それともジャマーアトの一員であるかは、明確に区別されているようであり、例えば上述のバライェフは「彼はジャマーアトには属さず、彼と地元のチェチェン人傭兵ワッハーブ派との関係は形式的で、貴方、私達であった」(70)。

独立派メディアの戦闘報告では、組織地域は不明なものの、明らかに野戦軍指揮官とは異なる集団であるアミールに率いられる部隊の活動が主張される。その1人アミール・アダム amir Adam 本名アダム・ウマラトフ Umalatov は、ジュンドゥッラーフ部隊の指揮者であった(71)。同じく、ヤルムーク・グループのリーダー、ムスリム・アタイェフ MuslimAtajev が、アミール・ヤルムークとしてグロズヌイ周辺で活動していたが、2005年ナリチクで殺された。彼はカバルディノ=バルカリアのジャマーアトに属していた(72)。

北コーカサスの諸地域には、チェチェンと同様の方式で作られた、しかし、信者数の関係で地域的に大きな規模のジャマーアトが存在する。ダゲスタンには「ジェンネット（天国）」、「シャリアト（神法）」、イングーシ人の「ハリファト（カリフ国）」、ノガイ人の「ノガイ・ジャマーアト（別名ノガイ大隊）」などが自国内外で活動している。このような

民族的あるいは共和国規模のジャマーアトの起源は第1チェチェン戦争時にハッターブが設立したワッハーブ派神学校「カフカース」にあるといわれている(73)。国軍系、私兵集団系、外国人志願兵などに次いで、それらが連邦軍の攻撃によって壊滅的打撃を被った後、地域的グループによる戦闘集団が現れたのである。

結論

1　第1次チェチェン戦争期の野戦軍司令官はほとんどが、ソヴィエト期に赤軍、内務省、警察などの組織に所属した経歴を持つ人々である。

2　中にはゲライェフなど正業に就いた経歴がないか、ほとんどない人々が含まれる。

3　第1次チェチェン戦争以来の野戦軍司令官は、第2次チェチェン戦争では、開戦よりほぼ1年で、戦死、逮捕、投降し、その欠はアラブ義勇兵で埋められた。

4　2002年頃より、野戦軍司令官ではなくアミールと呼ばれる現地人戦闘指導者の名前が多く見られるようになる。彼らはグロズヌイ南郊の平地部農村出身者で、世代的にはソヴィエト期の文化とも近代的教育とも無縁の人々であると考えられる。これはターレバーン政権下のアフガニスタン同様にチェチェン社会の反文明化を示すもので、チェチェンとロシアとの関係がどのような方向のものになろうと、将来のチェチェンとロシア社会の重荷になると考えられる。

注

(1) Kurbanov,Ruslan.Spread of Jihad;The Original Factors and the Scope of Islamic Radicalization in the Northern Caucasia, *Central Asia and the Caucasus*,No.6(30)

(2) 拙稿平成12年、50頁

(3) Daniel'i dr.,s.24

(4) Dudajeva,Alla.*Million pervyj*,Moskva,2003,s.146-7

(5) Troshev,2003,s.64。ただし、Pyganov,s.54では、ジャーナリストのニコライ・アスタシュキンに民兵3万人と述べている。

(6) Daniel',s.25

(7) Alla,s.169には、旧友でソ連戦略空軍大佐 Ruslan Shakhabov にチェチェン軍創設を望み、議会はシャハボフに少将の階級を授与したとある。

(8) 北川平成12年、45頁

(9) 同、44頁

(10) Seely,p.120。根拠は ITAR-TASS,0001 GMT, 8 February 1992,BBC monitoring,SU/1314B/6,26 February 1992

(11) Av'jutskij i Mili,s.10-11,Ts.A.K,2(26)2003

(12) Troshev,2001,46 。なお、アラはアフガン大隊（アフガン戦争帰還兵部隊）が存在したとする（Alla,s.224)。

(13) Troshev,2001,s.11

(14) Utra（ここで『ウートラ』とするのは、同紙がロシア政府当局発表に基づいて掲載したチェチェン野戦軍司令官のリストが2000年12月27日付で、The so far Living Chechen Field Commanders (http://freepublic.co. forum. a3a4a3. htm,Smith, p.80,180,231）としてHP上に投稿されたものであるが 、同紙記事が確認できるまで便宜的に使用したい。および、Smith,p.80,180,231。

(15) Troshev,2001,s.73－4

(16) Alla,s.341

(17) Alla,.s.487では、Khaikhorov。

(18) Troshev,2001,s.118

(19) Abubakarov, s.185

(20) メモリアル協会出版の『ロシアとチェチェン－失敗と犯罪の連鎖』モスクワ、1998年（Daniel',s.354－394）に

よる。以下同じ。

(21) Troshev,2001,96,98;Pyganov,s.119-129

(22) Charles Brandy,Chechnya:A Beleagured President,*Conflict Studies Research Centor*,No.OB61,http://www.pims.org/Events/Projects/CSRC/ob61.htm

(23) テイプに関しては、北川誠一2000年、平成12年を参照せよ。

(24) S.Pyganov,Vtorzhenie v Rossiju,M.2003,s.78-80。同様な情報はHP「第2次チェチェン戦争時のチェチェン共和国軍の戦闘序列」(http://www2.odn.ne.jp/ ~cae02800/russia/chechen/ob2.htm) および戦間期の非国軍武装組織を中心とする「第1次チェチェン戦争時のチェチェン共和国軍戦闘序列」(http://www2.odn.ne.jp/~cae02800/russia/chechen/ob1.htm) があったが、典拠が明記されていなかったのでここでは引用しなかった。

(25) http://groups.yahoo.com/group/chechnya-sl/messages/22914?expand=

(26) 彼について、Mironov,Vjacheslav.*Ja byl na etoj vojne, Chechnja*,god 1995,Moskva,2001 ,s.368

(27) Blandy およびその他による著者のメモで不備なものである。

(28) Abubakarov などにより作成。

(29) Av'jutskij i Mili,s.11-12 (ソースは *Serzhant*,Moskva,2000,N0.13.s. 8)

(30) Sobaka Dossoer,http;//www.diavritica.com/sobaka/dossier,barayev.html ; Rotar',2001,s.66

(31) Av'jutskij i Mili,s.11-12 (ソースは *Serzhant*,Moskva,2000,N0.13.s. 8)

(32) 姓は不明。他の資料には見えない。

(33) http://www.dispatch.co.za/1999/10/02/foreign/CONTROL.HTM ; http://www.taipeitimes.com/News/archaives/2000/02/18/0000004824両方ともニュースソースは、AFP。マスハドフは、第1次チェチェン戦争中の1996年2月ロシアとの和平派で部隊を解散しようとしたTaus Baguraevを逮捕したことがあった(Pryganov,s.96)。

(34) Pyganov, s.136

(35) Av'jutskij i Mili,s.12。必要に応じて『ウートラ』紙で補強。

(36) Melanie Orhant,New/Russia:Slaves of Shari'ah,Stop-Traffic Listserver, http://www.friends-partners.org/partners/stop-traffic/1999/0884.html

(37) http://www.moscawtimes.ru/stories/2005/01/18/012.html ; http://www.mosnews.com/news/2005/02/11/arsan.shml。ソースは『コメルサント』紙および、独立派HP。

(38) Pyganov,s.120-121

(39) http://localhost.User/islam/Desktop/Pravda.Ru%20%3FBRIGADE%20GENERAL%#F%20CAP 等。

(40) *Caucasian Not*,http://eng.kavkaz.memo.ru/news/?srch_section2=engfilChechWLord;http://www.diacritica.com/communique/content/issuetwo/b.html;subscribe.ru/archive.news.medis.chechnyafree/200401/05124340.htlm

(41) Pravda,Apr.24,2001http://newsfromrussia.com/hostpots/2001/04/24/4117.html ; http://www.vor.ru/Chechenya/commentaries_404.html

(42) http://www.muslimedia.com/ARCHIVES/world01/chec-baray.htm

(43) http://www/freerepublic.com/focus/news/708187/posts。ソースはINTERFAX。

(44) http://english.pravda.ru/hotpots/2002/09/20/36972.html。ソースはRIANovisti。また、『プラウダ』はリズヴァンの死因を活動資金を巡る内輪もめであるとする。

(45) http://groups.yahoo.com/group/chechnya-sl/messages/22914?expand= 1

(46) ibid.,

(47) http://www.agentura.ru/english/timeline/2000/batalov/

(48) http://www.vor.ry/Chechenya/commentaries_402.html

(49) Pyganov,s.298-290。状況から見て2000年4月以降と思われる。

(50) カフカス・センター、英語版、2039号、2004年9月9日付。

(51) http://www2.diary.ne.jp.user.613839

(52) *Urta*

(53) *Utra* ; Troshev,2003,s.113,142

(54) Troshov,2003,s,113

(55) Troshov,2003,s.142-3

(56) *Utra* ; http://groups.yahoo.com/group/chechnya-sl/messages/22914?expand= 1 ; //english.pravda.ru/main/18/88/351/12558_Basaev.html ; Troshev,2003,s.111-115,120 ; *Caucasian Not*, http://eng.Kavkaz.memo.ru/news/?srch_section2=engfilChechWLord

(57) Troshev,2003,s.113
(58) Hexogen Trace-3,*Novaya Gazeta*,Jan.13,2003;//eng.terror99.ru/publications/084.html
(59) Troshev,2003,str.107
(60) ソースはRIA Novosti(*Newyork Jewish Times*,nyjtimes.com/cober/08-2-04/TerroristGeratkilled.htm
(61) *Chechnnya FREE.RU*-actual news from Chechen Republic,N.155,05.01.04//
(62) http://chechnya.blockpost.com/2003_11_09_chechnya_archive.htlm ソースは、RIA Novosti,Nov.12,2003
(63) 『プラウダ』、英語、ハイパー版、2003・01・04 Pravda.ru/hotspots/2003/01/04/41617.html
(64) http://Eng.kavkaz.memo.ru/newstext/engnews/id/667393.htlm
(65) http://eng.mvdrh.ru/index.php?neewssid=1041
(66) http://www.cdi.org/russia/johnson/7140-6.htm
(67) http://web.radicalparty.org/pressview/print_right.php?func=detail&par=12089
(68) http://english.pravda.ru/hotspots/2002/07/09/32052.html
(69) Dudayev,Umat,Chechnya:Chechens Fear"Wahhabi"Threat,初出 *IWPR*,19 December 2002 (*Religioscop*,26 December 2002) www.religiouscope.com/notes/2002/116_chechen_wahhabi.htm
(70) Pyganov,s.136
(71) http://jeeran.com/news4.html；*JihadUnspun*,Sep.04,2004 (http://www.jihadunspun.com/intheatre_internal.php?article=99590&list=home.php&)。副官はアブドゥル・スフィヤン Abu Sufijan (Adudul Sufijan) であった (http://future.jeeran.com/news4.html)。
(72) *MN*,2-8February,2005 (http://future.jeeran.com/news5.html)
(73) Riskin,A.Vakhkhabisty pribirajut k rukam Jug Rossii,NG,4 feb.,2005

文献目録

Abubakarov,Tajmaz.*Rezhim Dzhokhara Dudajeva－Pravda i Vymysel*,Moskva,1998
Daniel',A.Ju. i dr.*Rossija-Chechnija-Tsep' Oshibok i Prestunlenij*,Moskva,1998
Dudajev,Alla.*Mllion Pervyj*,Moskva,2003
Khlebnikov,Pavel.*Razgovar s Varvarom*,Moskva,2003
Pyganov,S.i dr.*Vtorzhenije v Rossiju*,2003,Moskva
Potal',I.,*Pylajushshije Oblomki Imperij*,Moskva,2001
Troshev,G. *Moja Vojna*,Moskva,2001
On zhe, *Chechenskij Retsiidiv*.Moskva, 2003
Evangelista.M.The Chehcen Wars, Washington,D.C.,2002
Seely,R.*Russo－Chechen Conflict*,1800-2000,London,2001
Smith,S.*Allah's Mountains*,London and NewYork,1998
Tracey,C.G.*The Russian Federation in Transition and the Case of the Chechen War(1994-1996)*,The University of Sberdeen PHD Dissetation,2000
北川誠一「チェチェン市民の社会的帰属意識」『旧ソ連における市民的アイデンティティーの研究』(平成11年度教育研究共同プロジェクト経費成果報告書)、東北大学、平成12年3月31日、
同上「チェチェン政治の対立的要素」『ロシア研究』第30号、2000年4月
徳永晴美『ロシア・CIS南部の勁乱』、清水弘文堂、2003年
植田樹『チェチェン大戦争の真実』、日新報道、2004年
林克明・大富亮『チェチェンで何が起こっているのか』、高文社、2004年